

昨今の総会（会合）雑感

使用者委員 水淵大作

毎年4月中旬～6月にかけて出張や会合が目白押しになる。国や地方公共団体等の公的機関の会計年度に合わせる形で4月1日～3月31日を事業年度としている企業や団体が多い事による。年度初めに前年度の事業報告と決算報告、そして今年度の事業計画と予算の承認が、主な議題となる。コロナ禍の4年間は、集合してリアルで行う事を控える所が大半であったので、大人数にならないように役員や理事だけが集まり他の一般会員は、書面による議決権の行使やインターネットを利用したリモート会議での参加といったハイブリッド方式で行われてきた。そして、会議後の懇親会も中止されてきた。リアルに直接会う機会が失われた期間であった。

ところが、昨年5月に感染症法上の位置づけが5類に変更されて以降、リアル一本の会合が復活した。まだ秋口は、恐る恐るという感じだったが忘年会・新年会とリアル会合が増えていき「4年ぶり」が正にトレンドとなった。そして本年度、リアル開催での会議が主流となる。地元企業や商工会・組合はさておき、全国組織の企業の代理店・特約店会や連合会においては、まず全国会に始まり、九州ブロック会、各県単位の会と続き、1団体に付き3度開催されることになる。これらが4月～6月に集中する。どの会とも久しぶりにリアルで行うので、本人出席を求められる。故にいっきに出張が増えた。

そんな中、時代の変化を痛感させられる事がある。まずこの4年間のブランクの間に世代交代が一気に進んだことだ。コロナ以前は、団塊の世代を中心に構成されていたメンバーが、その子弟の世代に交代しているのだ。「お久しぶり、元気でしたか」ではなく、「始めまして、よろしくね」の挨拶が何と多いことか。いっぺんに歳を取ってしまった気になる。次に出張先でのホテルだが、このところ宿泊したビジネスホテルのチェックイン・アウトは、全て自動機を使いセルフで行うようになっていた。これも人手不足・省力化対策の一つだろうか。話を昨今の総会に戻そう。「百年に一度の大変革期」と言われている自動車業界では、選択肢が多い中、各自動車メーカー、各国がグローバルスタンダードを目指し、技術開発にしのぎを削っている。群雄割拠状態だ。決着がつくのは、いつのことか。ましてや、その整備を担う我々は、尚更に不透明感が強まっている。原動機（エンジン）一つをとっても多岐に渡る。これに加えて運転支援装置装着車（サポートカー）に自動運転車（レベル3～5）が混在する時代が続く。しかもこれらを制御するシステムは、メーカー・車種・年式毎に全て異なるといっても過言ではない。「できる車しかやらない、できない車はできる所に依頼する」そうするしかない。競争から協業へ舵を切らねばやっていけない。その為には同業者間の強い信頼関係がなければならない。同業者間の会合の重要度が増している。故に、旧交を温めに、そして世代交代した若い人達と語らう機会を求めて、出掛ける昨今である。